ISSN 1340-2285

自然誌だより 冬
Natural history

三重自然誌の会情報誌 115 号　　2018年 3月

オオタカが棲んでいます

わが家は，松阪市の西郊にあり，堀坂山山麓に連なる丘陵地の一部を造成した住宅団地内です．団地の周囲には農耕地が広がり，冬になると，自宅の窓からオオタカが狩りをしている姿をみることができます．実際にはドバトを追い回しているだけで，獲物を捕ったところを見たことはありませんが．繁殖も近くで行っているに違いないとにらんで付近の丘陵地を歩いてみると，見張木とおぼしきアカマツで成鳥オスを発見しました(写真１)．周囲を見回し，自分がオオタカだったら巣はあそこに作りたいなと思う場所に行ってみると，ビンゴ一発！ありました．樹高約20m，胸高直径50cmほどのスギにオオタカのものであろう巣がかかっていました(写真２)．後日，再訪するとオオタカ(たぶんメス)が巣の上にいましたので(写真３)，この巣で繁殖したのは間違いなさそうです．子育ての邪魔をしてはいけませんので，その後の観察はしていませんが，この原稿を書いているとき（本年３月９日）にもオオタカがハシボソガラスに追われているのを事務所の窓から見ましたので，今年も繁殖は続いているのでしょう．

写真１　見張木で警戒するオス．2015 年４月８日

写真３　巣のメス．2015 年５月 28 日

写真２　オオタカの巣

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

ユリクビナガハムシ県内初記録の報告経験について

上　田　利　彦

普段は，県内の両生・爬虫類を中心に見て回っている私ですが，今回は「ユリクビナガハムシの県内初記録」という，両生・爬虫類ではほぼないであろう貴重な経験をしたので報告します．

少なくとも近所に生息する生物を見ておこうという思いから，数年前より庭や外灯に寄ってくる虫の観察を始めました．ところが始めてみるとその種の多さと言ったらありません！各種の図鑑がなければ種の同定すらできそうにないので，とくに見た目に面白く生態も変っているチョッキリ類（オトシブミ類）や体長数㎜といった小さなゾウムシ類に興味を絞っていました．

チョッキリ類は庭に植えた雑木に寄ってくるものが中心なのですが，2017年５月14日，若芽を吹きそろえた裏庭のブナの木の周りを調べていたところ，足元のヤブコウジにチョッキリと思しき虫を発見しました．これまで見たことのない種でしたので，すぐさま写真を撮って捕獲しました（写真１）．手元のハンドブックで調べましたが，よく似た種はあるものの触覚の形状が明らかに違い，同定することができませんでした．そこで，困った時の人頼み！ということで，以前，自然誌の会の合同調査をきっかけに度々昆虫についてご指南いただいている三重昆虫談話会の乙部 宏氏にメールで同定をお願いしました．

写真１　ヤブコウジにいたユリクビナガハムシ

写真２　タカサゴユリの葉先にいた糞をまとった幼虫

すると，早速返信メールが届き，「残念ながらご期待のチョッキリではありません．これはハムシの仲間で，ユリクビナガハムシです．ただ，はずれではありますが，ある意味当たりかもしれません！」とありました．なんで当たり！？というのは，本種であれば三重県初記録であるとのことでした．メールには，「庭にタカサゴユリがないか，あればその葉先にフンをまとった幼虫がいないか？」ともあり，早速辺りを探してみると，虫を見つけたところから数m離れた生垣の外側にタカサゴユリの若苗が３本あり，その葉先に直径５㎜ほどの土の塊みたいな，でんでんむしのフンのようなものを見ることができました（写真２）．

インターネットで検索すると，ユリクビナガハムシはユリ科植物の害虫として知られていることがわかりました．我が家の庭にはタカサゴユリのほか園芸種のユリ科植物が数種ありますが，そのうちいくつかの種は食害に遭いました（食害を受けた種：タカサゴユリ，オニユリ，スカシユリ，カサブランカ．受けなかった種：オリエンタルユリ＝ル・レーヴ，ツルユリ）．なお，こうした食害に遭ったのは今回が初めてのことです．

最初に発見したのは裏庭だけでしたが，初見から数週間後には玄関先のタカサゴユリやその他のユリ科植物でも幼虫が見られるようになりました．その後の観察で，食草として若い苗の柔らかい葉を好み，その繁殖サイクルは１か月ほどで，幼虫は８月まで，成虫は９月まで確認できました．また，終齢幼虫は地上に落ち表層で繭になりますが，採集したいくつかの繭を羽化させたところその80％が寄生蜂に侵されていることもわかりました．近所を散歩しがてらユリ科の植物を見て回りましたが，

食害されている状況は見当たらず，今回なぜ我が家で突然出現したのか不思議です．また，今後このまま定着するのか興味あるところです．

さて，今回の記録については，乙部氏の調査記録とともに三重昆虫談話会会誌に掲載されました(乙部・上田2018．津市でユリクビナガハムシを採集．ひらくら，62(1)：26)．また，観察記録について，拙い内容でしたが，三重昆虫談話会例会で発表もさせていただきました．

乙部 宏様，三重昆虫談話会の皆様，貴重な経験をさせていただきありがとうございました．

（うえだ　としひこ：津市久居一色町）

追いこんだ魚を奪い合うウミアイサ

今　堀　聖　史

２月の下旬にもなるとウミアイサが数十羽の群で北へ向かっているのが見られます．また，潮が動き始める河口の岸辺に分散して魚を追っているのをすぐ近くで観察できたりします．先日（２月21日）安濃川河口にはウミアイサが多くいて，岸近くで１羽のメスが顔を水中に入れてゆっくり餌を追い，離れた水面にも数羽が顔を水中に入れて泳いでいました．他の鳥に気持ちが向いていたので，岸近くで餌を追っているウミアイサの動きを見ていませんでした．海側から飛んできた数羽のウミアイサが目の前を通過し，しばらくして近くの岸辺で激しい水音がしました．ディスプレイをしているのかなと考えながら音がする方を見ると，数羽が狩りをしているのが分かりました．構図などを考える余裕もなくカメラを向けてシャッターを押し，魚を奪い合うようすの一部を写すことができました．

再生して写真を見みると，数羽のウミアイサが大きな魚を奪い合うようすが写っていました．鳥が餌を奪い合う光景はよく目にしますが，ウミアイサが餌を奪い合うのを見るのは初めてでした．

一部始終を写真から再現すると，最初に魚を咥えていたのは若いオスですが，大きな魚をうまく呑み込めなかったようで咥えて逃げる姿が写っています(写真１)．カワウやサギ類も大きな魚を飲み込むときは何度も咥えなおしたり水に漬けたりします．岸辺で３羽のウミアイサが魚を咥えた１羽を追いかけ，派手に水しぶきを上げて体の一部が見え隠れしていました(写真２)．十数枚あとの写真で魚を咥えていたのは最初の若オスではなく成鳥オスでした．魚の頭を喉の奥に向けて咥え，低い姿勢から嘴を上に向けて背伸びするように立ち上がって魚を飲み込むようすが写っていました(写真３)．獲物がもう少し小さい魚ならこうした奪い合いは起きないと思いますので，私にとってはラッキーでした．餌を奪われた若オスには不幸でしたが，彼も群の中で競い合って逞しくなっていくのだろうと想像しました．

３月下旬頃までは，少し沖合をウミアイサの群が北に向かっているのが見られますし，漁をする漁船の周りに群がって採餌していることもあります．北へ向かう鳥たちと思わぬ出会いがあるとうれしいものです．

写真１　若オスが魚を捕獲

写真２　魚の奪い合い

写真３　成鳥オスが食べる

（いまほり　きよふみ：津市久居小野辺町1454-30）

賀利大池・小池が国の天然記念物に指定されるまでの経緯 (2)

山　本　和　彦

2001年～2010年

この間の大池をめぐる社会情勢については，筆者の手元にある地元新聞の切り抜きが若干あるのみで，以下のようなことしか記すことができません．

当時の報道によりますと，2008年の尾鷲市議会で，地元議員から1993年に提出された「須賀利地区の活性化を求める陳情書」のことが取り上げられ，再度，国立公園の解除と大池の開発をすべきと提唱されています．これに対し当時の市長は，国の方針として国立公園の指定解除はできないとの見解を示しています．またこの議員は，東芝の社長に会い，大池に原子力発電所をと要望したこともこの年の地元新聞は伝えています．

このように21世紀初頭も大池の情勢は，20世紀後半と同様，いろいろな開発関係の話題がでてきていましたが，自然環境関係でもこの頃からいろいろな調査が実施され，その情報が発信されるようになってきました．まず，2001年に三重県が，地域で守りたい自然「須賀利大池」動植物調査結果を公表します（三重県環境部人と自然の環境共生チーム 2001）．これは県民から「地域で守りたい自然」の公募を行い，県民が大切に考えている自然の中から，６ヶ所の調査地を選定し，調査結果を冊子にまとめたものです．大池の調査は三重自然誌の会に委託され，2001年の６月～８月にかけて動植物相調査が実施されました．さらに2004年には，三重県自然環境保全条例に基づいて三重県指定希少野生動植物種が指定され，大池に生育するハマナツメ，ツクシナルコも指定種として登録されました．

筆者が当時顧問をしていた尾鷲高校自然環境研究部では，三重県内に生育するハマナツメの個体数を把握し，保全活動に役立てようと県内のハマナツメ自生地の調査を始めたのも2004年頃からでした．大池での調査では1000本を越えるハマナツメを数え，国内でも有数のハマナツメ群落であることが再確認されました．しかしこの頃から，全国的な問題となっていたニホンジカによる食害が大池でも目立ちはじめ，ハマナツメやツクシナルコも剥皮や被食などで大きな被害を受け始めます．2007年にはハマナツメ個体群が急速に衰退・枯死し，個体数がほぼ半減してしまうという状況になってしまいました．

そのような事態を受けて県環境森林部では，2006年度より希少植物ハマナツメの現状と衰退群落の回復を目的とした事業を開始しました．その一環として，大池における現地調査と保全事業を行うこ

写真１　大池湖畔のハマナツメ群落（2001年夏）

写真２　シカ食害，カワウによる水質悪化により衰退したハマナツメ群落（2010年夏）

ととなり，人間環境大学（愛知県岡崎市）の藤井伸二氏に指導してもらうなかで，2007年３月から大池におけるハマナツメの現状調査と保全事業が始まりました．この事業に尾鷲市と環境省も加わり，2018年現在もこの調査と保全事業は継続されています．

さらに2000年前後から，東京大学地震研究所，京都大学防災研究所，高知大学などの研究により，過去の津波の痕跡が海跡湖の湖底に残されていることが明らかにされ，地球科学の研究者から紀伊半島，四国にかけての海跡湖が注目されるようになります．大池においても高知大学理学部の岡村眞氏らにより湖底のボーリング調査が行われ，紀元前５世紀から10回の東海地震による津波痕跡が発見されています．大池の湖底には，過去3000年間における津波の記録が残されていることが解明されるなか，大池を含めた紀伊半島に散在する海跡湖の重要性が注目されるようになってきました．

また文化庁は，かねてから紀伊半島東部沿岸部の地学的景観を特徴付ける海跡湖群に注目し，海跡湖を地学的遺産として国の天然記念物に指定したい意向をもっていました．大池と小池は，ほとんど手付かずで残されていること，とくに大池は紀伊半島にみられる海跡湖群のなかでは広い水面を有していること等から天然記念物指定の候補地として注目され，指定に向けて動き出すことになります．

（続く）

（やまもと　かずひこ：尾鷲市小川西町８-40）

サイクリングで動物観察2017

清　水　善　吉

腹からふんぞり返って歩くのがトレードマークの私でしたが，一昨年の健康診断でメタボ判定を頂戴してから一念発起し，走ることにより減量に成功しました．昨年の健康診断で，撮影した胸部写真とメタボ時代のそれを見比べたドクターは，まるで別人やな！と驚いていましたが，ご心配なく腹の中は変わっていません．しかし，痩せるために運動するという生きものの摂理に反する行為の報いか，膝を痛めて病院で水を抜いてもらうハメになってしまい，走るのを止めて自転車に変えました．ここまでが，本誌111号で報告しましたので，続きです．

写真１　サイクリングコース．農道を山方向に向かい，中腹・すそ野の林道を横断し，阿射加神社に至る．

自転車を使って足で走るのと同じ距離では効果は期待できませんので，走行コースを見直し，自宅（日丘町）から農道を経て県道45号を堀坂峠に向かい，途中で森林公園への侍谷林道に入り，横滝寺・瑞巌寺をみて伊勢自動車沿いの農道に出で阿射加神社（小阿坂町）に向かい，神社で折り返して農道を適当に走って自宅に戻る約15km・１時間ほどのコースにしました(写真１)．自転車は，地元の学校に勤務していたときに〇子高生ウケ（間違っても「ダ」のつく漢字は入れないでください）をねらって通勤用に購入したもので，ちょっとだけいいやつです．

走ってみるとなかなか快適で，走行距離が延びた分，昨年の報告よりも生きものたちとの出合いも増えました．走行中にみつけたら写真を撮り，戻ってからコース地図に場所や日時等を記録しました．１年間に記録した動物の情報を，綱別に種名と確認内容，月日，字名を次に記載しました．年はすべ

て2017年，市は松阪市です．

両生類：アカハライモリ死体5/15伊勢寺町，ニホンヒキガエル（亜成体）6/9岩内町，

爬虫類：ニホンイシガメ目撃5/8小阿坂町，ヒバカリ死体5/16伊勢寺町（写真２），アオダイショウ（亜成体）目撃5/16伊勢寺町，ヒバカリ轢死体5/22伊勢寺町，シマヘビ目撃6/15小阿坂町，ヤマカガシ目撃6/24岩内町，ヒバカリ轢死体7/14伊勢寺町，シロマダラ轢死体7/25小阿坂町，ヤマカガシ轢死体8/20小阿坂町，ヒバカリ轢死体8/20小阿坂町，ヒバカリ目撃9/1小阿坂町，ヒバカリ轢死体9/26小阿坂町，ヒバカリ轢死体9/30小阿坂町，シロマダラ轢死体10/4伊勢寺町(写真３)，ヤマカガシ轢死体10/5岩内，ヒバカリ轢死体10/30伊勢寺町，ヤマカガシ（亜成体）轢死体10/30伊勢寺町，ヒバカリ轢死体11/1伊勢寺町，ニホンマムシ轢死体11/2伊勢寺町，

哺乳類：タヌキ（疥癬症）死体4/21伊勢寺町（写真４），ヒミズ轢死体5/2伊勢寺町，アライグマ（亜成体）死体6/12伊勢寺町(写真５)，ニホンリス目撃10/5伊勢寺町，ニホンリス目撃11/12伊勢寺町，タヌキ轢死体12/12小阿坂町

ヘビ類では，普段はあまり見かけることの少ないヒバカリが半数を占めていることにちょっと驚きますが，この年だけの現象なのか地域の特徴なのか引き続き観察していきたいと思います．また，けっこう珍しいシロマダラを含めてこれだけのヘビを捕獲しようと思えば大変な労力ですので，みつけた死体を標本として活用できるように受け入れ先を探そうと考えています．松阪市では情報の少ないニホンリスも横滝寺付近の林道で２度目撃しましたので，意外と里の方に下りてきているようです．タヌキに疥癬症が広がっていることや，外来種のアライグマの子どもの確認は繁殖している証拠と，記録することで情報は生きてきます．

上記以外にも，アマガエルなどの鳴き声を聞いていますが，あまりにも頻繁なので記録しませんでした．また，多くの野鳥にも遭遇し，とくに冬場はタカ類が目につきましたが，鳥全般について種判別の自信がなく，標本や写真があるわけでもないので，報告は控えました．

さて，肝心のわが身についてですが，やはり足で走ることに比べたら運動量が少ないようで体重の減少は止まり，現状維持で推移しています．

写真２　ヘビ類の半数を占めたヒバカリ

写真３　夜行性のシロマダラ

写真４　疥癬症のタヌキ

写真５　アライグマの亜成体と自転車

（しみず　ぜんきち：松阪市日丘町 1386－17）

何食べているの？と聞いてみたい

今　堀　聖　史

コガモ～泥の上にご馳走？

春の日差しが暖かくなった頃のことです．松阪市曽原町の海岸堤防内側にある排水池でカモが歩き回った足跡が模様のように池の泥に残っていました．誰が歩いたのか探しているとコガモのつがいでした．おいしそうにと言うか，一生懸命にと言うべきか，泥の表面でなにかを食べているようすで，そこには栄養豊富な食べ物があるのだろうと思われます(写真１)．池に降りて表面をすくってみる元気はなく，あれこれ想像してみると，泥や浅い水の表面に藻や微生物が薄い膜を作っているのかもしれません．暖かい日に池や田んぼにカモの足跡を見つけたら辿ってみてください．面白いシーンが見られるかもしれませんよ．(2015年４月24日)

カルガモ～清流で食べているものは？

美杉町下多気の清流で８羽のカルガモの群が採餌していました．小さな淵の緑色に見える水は周りの木々を映し，浮かんでいるカルガモは河口周辺やため池のカルガモとは別種のように見えます．上流の瀬は少し急な流れで，岸近くは緩やかな渦が水溜まりを作り，カルガモの群は淵の下流側と瀬の中ほどの間を何度も採餌しながら往復しています．しばらく観察すると，水の表面に流れてくるものを食べる，水深が浅い瀬で逆立ちして何かを捕って食べる，淵の岸壁の表面を嘴でこそげて食べる(写真２)，三通りの方法で餌を採っています．瀬で水底を漁っているのは水生昆虫ではないか？岸壁の表面は藻だろうか？と推定するのみで，道端に雪が残り昼間の気温２℃の日のこと，川原へ降りることなく，淵から30mほど離れた道路の車中から眺めていました．(2018年２月６日)

ミサゴ～深刻な身の上を暗示する獲物

津市香良洲海岸の堤防沿いを雲出川河口に向かって走っていた時，左岸の小高い砂浜付近から大きな鳥が飛び出し，低空でこちらに向かってきました．濃い褐色でトビかハヤブサかと目を凝らしていると，砂浜に立っている採貝禁止の看板に止まりました．双眼鏡で確認するとミサゴで，脚に大きな黒い獲物を掴んでいるのが見えました．カメラを持って車から降りて少し近づき始めた時，後ろから来た散歩の方が「大きな魚を持っとるなあ」と言いつつ私を追い越していきました．ミサゴは獲物を掴んで飛び立ち，浜辺に沿って低空を古川の方へ見えなくなりましたが，写っていた魚を見てびっくりしました．大きな魚は干からびて目玉はなく，砂浜に打ち上げられて何日もたったものでした（写真３)．ミサゴが干物のような魚を掴んでいるのを見たことがありません．このミサゴは狩りができず，空腹に耐えかねて干物を拾ったのでしょうが，食べられそうにありません．猛禽類が翼や目を怪我して衰弱し，保護された姿は津市在住の獣医師・高橋松人さん宅で何度も観察させていただきました．今回のミサゴは低空を飛んでいきましたので，衰弱して保護される一歩手前の状態なのだろうと思いますが，実際に保護してくれる人に出会える確率は小さいでしょう．(2018年１月30日)

写真１　カルガモ

写真２　コガモ

写真３　ミサゴ

（いまほり　きよふみ：津市久居小野辺町 1454－30）

事務局から

○鈴鹿青少年の森公園湿地保全活動の報告

写真１　今年の作業のようす

１月16日に約30人の参加，好天のもとで実施しました．シラタマホシクサが増すぎて草刈り大変やなー（茎が草刈り機にからみつく）などと贅沢な文句を言いながらの楽しい作業でした（写真１）．最近はたくさんのボランティアが作業に参加してくれるお陰で湿地環境は急速に回復しています．写真２は整備を始めてから５年後のようすです．それが，５年間放置されて写真３のような状態になっていました．2011年から作業を再開し，現在は写真４のようになっています．遷移が進行していた山すそや小高い部分を湿地に戻し，埋土種子の発芽を促すことにより湿地植物の回復と湿地面積の拡大をはかっています．湿地面積は当初の２倍ほどに拡大可能と予測しており，それまでは作業を継続していきたいと思っています．

写真２　2005年５月撮影

写真３　2010年５月撮影

写真４　2017年４月撮影

○調査会のご案内

今年から，三重昆虫談話会と合同で「調査会」を年４回実施します．年間計画を同封しますので，お気軽にご参加ください．本会の担当は中 優･運営委員ですので，ご不明な点がありましたらなんなりとお問い合わせください．なお，各地で実施されているような講師の方が自然について解説しながら歩くツァー「観察会」ではありませんのでご注意ください．「調査会」とネーミングは固いですが，動植物を採集・観察しながらおしゃべりして歩く気楽な，ユルーイ集まりです．それは，季節の良い時期しか実施しないというスタンスにも示されています．

編 集 後 記

今冬は冷え込みましたね．赤目四十八滝の氷瀑も久しぶりに堪能しました．凍りすぎて，人が乗っても割れないくらいの厚い氷が水面にも張ってしまい，それを割りながらのハンザキ調査は大変でした．春号は６月発行予定ですので，お便りください（善）．

自然誌だより115号

発 行 日　2018年３月26日
事 務 局　〒515-0835 松阪市日丘町1386－17
清水善吉方　三重自然誌の会
http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi

発 行 者　三重自然誌の会
郵便振替口座　00800-5-17842　三重自然誌の会
年 会 費　1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp